

地域で、農業で学ぶ－近江楽座「とよさらだ」グループ

増田 佳昭（顧問、生物資源管理学科）、岡 祐助（2012 年度代表）
政木 芽衣（2011 年度代表）、上田 和幸（2014 年度代表）

とよさらだの発足と経緯

「とよさらだ」グループは、本学が実施する学生の課外活動プログラム「近江楽座」に参加する学生グループである。活動開始は 2009 年の冬、豊郷町で耕作放棄されていたビニールハウスを借り受けての野菜作りが活動の始まりだった。その後、地元農家の米作りや野菜作りを手伝ったり、各地のイベントに参加したりと活動の幅を拡げてきた。湖風祭での豚キムチ丼は恒例の人気メニューとなっているようだ。

活動の発端は 2008 年の秋に遡る。当時、本学大学院に在籍して近江環人地域再生学座受講生であった船田賢君（現彦根市役所）が、プロジェクトテーマとして豊郷町での「農業振興」を取り上げたいと増田に相談があったことに始まる。当時生協理事長だった増田は、生協食堂にサラダ野菜を納品してはどうかと「大学生協サラダバー」構想を提案した。すでに豊郷快蔵プロジェクトで豊郷町と本学環境建築デザイン学科とのつながりがあったこともあってか、あるいは船田君の行動力の故か、現地で長年利用されずに放置されていた稲育苗用ハウスを格安で借り受けることができたのである。

荒れ放題のビニールハウスは、背丈ほどの草が生い茂り、鉄パイプだけの廃墟のような姿をさらしていたが、2009 年 2 月に除草と整地作業、3 月にビニール貼り作業を行って、何とか第 1 歩を歩み出したのであった。学生たちが苦心して栽培したサラダ用のベビーリーフは、同年 5 月 13 日に大学生協食堂



に初出荷、一盛り 85 円の価格設定であった。

その後、2010 年には大津西武百貨店で販売、豊郷町の夏祭り「とっとまつり」、県立大学湖風祭、彦根市の朝市などに参加、また J A 東びわこが運営する農産物直売所「野菜の里 2 番館」に出荷と活動を拡大してきた。2011 年には、県立大学内の空き地に新たに耕作地を確保、豊郷町の農家のもとで米作りをはじめた。2012 年にはそれまでの活動を継続するとともに、古くなったハウスのビニールを貼り替え。同年 7 月の皇太子県立大学来学の際には、親しく活動報告をする機会を得た。

このような活動を通じて、学生たちは何を学んだのだろうか、また、地域にどのような貢献が出来たのだろうか。以下では、3 人のプロジェクトのリーダーたちに活動への取り組みと感想を語ってもらった。



とよさらだプロジェクトの活動

岡 祐助

私たちは、ハウス栽培と露地栽培で野菜づくりを行っています。地産地消の促進や安心・安全である無農薬野菜を提供すること、野菜づくりの機会が少ない学生が、活動を通して野菜を食べること、物を売る体験をすること、地域とのつながりを持つ場を作ることを目的として活動しています。所属メンバーは現在約10名です。主に週末に学生数名で農作業を行っています。野菜も生き物ですので、平日も予定が空いている学生が水やりを行っています。

この活動のきっかけは、滋賀県犬上郡豊郷町で古民家の改修を行っていたとよさと快蔵プロジェクトに所属していたメンバーが豊郷町で耕作放棄地となった土地を見つけ、この土地を再生活用したいと考え、2009年2月から活動を始めました。活動当初はビニールハウスの補修から始まりました。耕作放棄地となっていたビニールハウス跡地は雑草が生い茂り、ハウスの骨組みだけが残っている状態でした。学生のみでなく地元農家の方や先生方、農協職員さんの協力のもと除草作業から圃場整備を行い3月下旬にはビニールハウスを張ることができました。

栽培した野菜についてですが、大学生協と交渉し販売量から販売価格まで生協担当の方と話し合い決めていき、食堂に販売することができました。こうして私たちの活動を学生の間で知ってもらえるようにしました。また彦根市にて月に一度開かれている朝市や、農協が運営している直売所での野菜販売も行うようにして、私たちの活動を地域の人々に向けて発信するとともに、野菜の流通経路を確保しました。ここで出た売り上げは次の活動資金に回していききました。

豊郷町のイベントにも積極的に参加し、5月には大津で開かれる物産展に豊郷町の方とともに野菜販売を行い、8月には豊郷町で開かれるお祭りにも参加しました。また豊郷町の農家さんの協力の下、田植えから収穫までのお米作りも体験させていただきました。収穫したお米は滋賀県立大学や聖泉大学の学園祭で販売しました。こうして地域との繋がりを作り、地産地消にも貢献しました。また滋賀県が推奨する「環境こだわり農産物」のPR活動に参加させていただき、一部を「環境こだわり農産物」として認証していただきました。このPR活動をきっかけに彦根市鳥居本町の農家さんとお知り合いになり、わらびの収穫体験もさせていただきました。私たちの取り組みを皇太子殿下にも紹介する機会もいただきました。

2012年には、ビニールハウスのビニールを新しく張りかえる作業も行いました。他の学生団体との繋がりも強くなり、琵琶湖のブラックバスを駆除している滋賀県大 BASSER' S さんから頂いた魚粉を使い大根を栽培しました。また食育推進隊さんが地域の子供たちに料理教室を開く際に私たちの野菜を使ってもらい、またわたしたちの活動にも手伝ってくださり、子供たちに野菜作りの楽しさを伝えるお手伝いができたと思います。とよさと快蔵プロジェクトさんが豊郷町で開くイベントにも参加させてもらい、またとよさと快蔵プロジェクトさんが豊郷町で経営しているお店に私たちの野菜を使ったサラダを販売してもらいました。

栽培から販売へプロジェクトで学んだこと

政木 芽衣

とよさらだプロジェクトに参加して、私は農業が好きになり、食べ物に対する見方が変わりました。畑を好きになったのは、活動を始めてから1年ほど経った3回生の夏でした。2回生のときには、畑にいくたびに先輩たちが作ったミニトマトがたくさんできていたのに、私たちが関わったその年はうまくいきませんでした。それが悔しくて、秋冬はたくさん収穫できるよう頑張ろうと思ったからです。夏休みのうちはほとんど毎日畑に行き、水やりや固くなった土を耕したりするなど、秋にむけての準備をするうちに、だんだん畑に愛着がわいてきたのです。

秋からは、ダイコンやカブなどの根菜を中心に、白菜などの葉物野菜も栽培しました。ビニールハウスの中であれば虫害はあまりないだろうと思っていましたが、カブやハクサイの葉は柔らかいためか、虫がよくついていました。ほうっておけば、その葉はほとんど食べられてしまうため、毎回虫の駆除に追われました。そうするうちに野菜ひとつひとつにも愛着をもつようになり、それまでより楽しくなりました。収穫を迎え、カブをハウスの外に出して置いていると、隣の畑のおばさんが、「すごい立派な葉しとるねえ」とほめてくれました。そのとき「頑張ってたかった」と達成感を覚えたものでした。

こうして野菜を育てていくうちに、農業は時間がかかるし、自然条件にも左右されるため本当に大変だと感じましたが、だからこそ収穫の達成感が大きく、そこに面白みがあるのだと思いました。農家さんが、我が子のように野菜を栽培する気持ちも共感できます。農業に頼らない野菜作りは、思うようにいかないこともしばしばで、虫害でダメになってし

まったときは本当にショックでした。夏の雑草は、刈っても刈っても生えてきて、除草剤を使っていたらもっと楽なのにとったりもしました。それでも農薬を使わなかったのは、どうせつくるなら安全な野菜を作りたいと思ったからで、そこを曲げることはできませんでした。

無農薬野菜の栽培の大変さだけでなく、売ることの難しさも感じました。私たちは、育てた野菜を農協の直売所に出荷していますが、そこでは値段を各々で決めることができます。そこでの葛藤は、無農薬だから少し高めの値段にしたいと思う一方、売れ残りたくないからそこまで差をつけるわけにもいかない、ということでした。また販売する上で、野菜の形が少しでも悪いと売り物にできないので、そのことも値段をつけるうえで葛藤となりました。カブも味は同じでも、形がいびつなものは売れません、自分たちで食べる分には問題はありませんが、販売となると見た目にも配慮しなくてはいけないので、栽培する上で気を付けました。

私たちは作る量も農家さんほど多くないので、売れ残りがあっても少しマイナスになる程度ですが、農家さんにとっては売上が生活費につながるので、無農薬で経営していくことは本当にすごいことだと感じました。また活動を通じて農家さんのお話を聞いていると、近年の消費者の安心・安全志向やTPP問題や海外からの農産物の輸入による野菜の低価格化など、数多くの問題を直接聞くことができ、販売している野菜の値段ばかり見て買ってしまいがちですが、質に対する理解も必要だと思いました。私は農業に興味を持ち始めてから、それまで気にしなかった作られ方や農薬の程度にも目を向けるようになりました。地域に密着して野菜の栽培から販売までの一連の流れを体験できた、とよさらだの活動は私の中でとても貴重な経験となりました。

地域の特産品づくりを

上田 和幸

とよさらだでは環境こだわり農法で野菜を栽培していますが、その分うまく野菜が育たない、害虫が大量に発生するなど苦労することや失敗することが多いです。今後は失敗を無くし、目的の一つである環境に配慮した野菜作りを成功させていきたいと思っています。また、2013年度には豊郷町の特産品のひとつである坊ちゃんかぼちゃを豊郷町の方とともに栽培しました。ここで得た知識をもとに、とよさらだ独自の坊ちゃんかぼちゃの栽培を行うことで、豊郷町への地域貢献に繋がるのではないかと考えてい

ます。さらに目的の一つである地域との繋がりを、さらに強めたいと考えています。イベントへの参加に力を入れ、とよさらだで栽培した野菜を使ったお菓子を販売していき地域の特産品となるようなものを作りたいと思います。

活動の4つの要素と「地域を通じた教育」の可能性

さて、とよさらだプロジェクトの活動の成果をどのように評価すべきだろうか、少しばかり考察してみたい。岡君が述べているように、とよさらだプロジェクトの活動目的は、「野菜作りの体験」、「商品の生産と販売」、「地域とのつながり」にある。プロジェクトが掲げてきた活動目的は、必ずしも固定的なものではないようで、プロジェクトのブログに掲載されている2009年当時のミッションは、「高齢者が元気で、生きがいのある生活をプロデュースする」、「大学生や社会人が利用する食堂に、安全で新鮮な野菜を供給する」、「使われない土地を再生し、もう一度利用する」であるから、現在のミッションはそれに較べると、より現実に即したものになってきたように思われる。

今回の学部年報のテーマは「地域再生」、「活性化」であるが、とよさらだプロジェクトの活動が直接的に地域再生や活性化に貢献したかということ、正直なところ心許ない。というよりも、豊郷町の地元の方は農家を中心に彼らの活動を温かく見守ってくれ、また大変喜んでくれているという感触は持っているのだが、それを十分に検証するだけの情報が不足しているということかもしれない。この点については、今後の検証が必要だろう。

それよりも、注目したいのは学生たちの成長である。岡君は先述のように、プロジェクトのミッションを「農業体験」、「販売企画と実践」、「地域との交流」と整理している。私なりに再整理すれば、とよさらだプロジェクトの活動は、次の4つの要素を持っているように思う。それは、(1)体を動かして具体的なものを作り上げる「ものづくり」、(2)売れるものをつくるという意味での「商品の企画・販売」、(3)地元関係者などとの「交流」、(4)自分たちの活動や思いを他者に伝える「表現」という要素である。このような4つの要素を通じて、学生たちがどのように成長したかを考えてみる事が出来るのではないだろうか。

野菜の栽培は、自らの手足を動かして作業し、何かを作り上げるという一連のプロセスである。一種のもの作り体験であるが、政木さんが書いているよ

うに、「ものづくり」は活動の入口として魅力的なようである。植物を栽培し、食べ物を自らの手でつくるということは、そのような経験の少ない学生にとって貴重な経験である。土壌を改良し、うねたてをして苗を植え、雑草や害虫とたたかいながら野菜を育てるわけであるから、いろいろな工夫が必要不可欠である。

また、それを売るとなるとこれまた別の努力が必要である。とよさらだプロジェクトはたんにもものを作るだけでなく、それを「販売」することも重視してきた。生協食堂への納品も、JA直売所への販売も、それを需要する他者（消費者）を意識することなしに成り立たない。さらに、地域の人々との各種のイベントを通じた活動や米作り、野菜作りを通じた地元の人たちとの交流もメンバーにとっては大きな魅力となっている。そしてその成果は、さまざまな機会にパワーポイント資料を用いて発表したり、ネット上で発信したりするなど、さまざまな自己表現を行っている。

こうした活動は、おそらくプロジェクトメンバーが成長するための大きな要素だったと思う。2013年度から本学ではCOC事業（知と地の拠点事業）が始まっており、地域を志向した教育の再構成が求められている。このような地域での活動が学生の発達の中でどのような効果を持つのか、教育論として大いに関心のあるところである。「ものづくり」、「企画・販売」、「交流」、「表現」という経験軸をもつ活動に多くの学生が関わり、滋賀県立大学ならではの教育と地域貢献の姿を実現してくれることを期待したい。